

---

# 民の剣と国の楯

坂本伊能

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

民の剣と国の楯

### 【Zコード】

Z3870F

### 【作者名】

坂本伊能

### 【あらすじ】

宰相である男の屋敷に黒衣の男が現れた。片刃刀を持つ黒衣の男を見て、彼は何があつたのかを悟る。すぐに私兵に迎撃を命じるが

……。

黒衣の男が立っていた。

白髪じみた長髪を風になびかせ、黒衣をはためかせている。  
見るからにひょろりとした男。手に片刃刀を持っているのが似つか  
わしくない程の、優男だった。

バルコニーから乗り出して、屋敷の主人は黒衣の男を見ていた。  
黒衣の男は整えられた庭の真ん中を通る道を歩き、屋敷へと近付い  
てきている。

広い庭だった。真っ直ぐ歩いて1分ある庭が、主人の自慢だった。  
その1分を至上のモノとせんが為、腕の良い庭師を呼んで整えさせ  
てある。

その道を見知らぬ黒衣の男が歩んできている。他でもない恐怖が、  
主人の心を蝕んでいた。

「待ちなあ、兄ちゃん！」

しかし、屋敷から数人の男達が飛びってきた。

黒衣の男の行く手を遮り、剣、斧、ナイフ、好き勝手な得物を構え  
た。

こんな事もあるうかと主人が雇つた私兵である。執事が雇つた者の  
為、腕の程は知らなかつた。

「い」つから先は通さねえぜ

「いや、生きて返さねえ！」

ナイフの男が、まず斬りかかつた。

だが剣とナイフではリー・チが違います。駆け寄る男を一刀の下に、首から脇を切り落とした。

血が噴き出て、壮大な庭が汚れた。だがそんな事はどうでも良い。黒衣の男を斬つても、結果は同じなのだから。

気にしないから、なんとしてでも黒衣の男を殺して欲しかった。

「テメエ！」

次に斧を持った男が行つた。

巨体に見合つだけのリーチを持つ、先程のナイフの男の様にはいかない筈だった。

だが振り下ろされた斧を、黒衣の男は容易く避けた。軽く右へ躲したのである。

敷き詰めた石畳の床に斧がかち当たる。耳に痛い金属音。思わず主人は目をつぶつた。

そして目を開けると、男の手が無くなっていた。斧を持った手が、地面に転がっている。更に足を切られ、達磨状態となつた。

斧の男は慟哭を上げていたが、それはまるで吹き出す水の様で、やがて小さくなつていき最後には完全に声が無くなつた。

残つた剣の男。

「オレを、他のヤツと一緒にするなよオー！？」

言つて斬りかかっていく。

ギンッギンッ、と2合切り結んだ。

しかし3合目には首を落とされた。首が空中に飛んで、ゴトッ、といつ気持ちの悪い音を上げた。

「く、くうッ！」

主人は急いでバルコニーから部屋の中へと駆け込んだ。壁に立てかけてあつた刀を、手に取る。

黒衣の男が操つていた片刃刀とは異なり、細身の刀だ。

片刃刀が厚みのある短めの刀身であるのに対し、刀は細い代わりに100cm近い刀身を持つていた。

黒衣の男は片手で片刃刀を扱つていたが、この刀は両手でシッカリと握つて、扱う代物である。

鞘から引き抜くと、刀は波打つ様な鋼を晒す。名刀と名高い品である。

それを持ち、主人は廊下へ飛び出た。

広い廊下。赤の絨毯と花が飾られていて、窓が突き当たりにしか無いのに、殺伐とした雰囲気は無かつた。

廊下に何人かの侍女達がいるのも、華やかさを添えていた。

「旦那様、私達はどうすれば……」

混乱しているらしい彼女達は、主人に意見を仰ぐ。

手に持つ剣に意識が向かない程に気が動転している彼女達を見て、主人は顎で部屋の方を示した。

「部屋から出ず大人しくしているのだ。

大人しくしていれば、あの男とて君達に危害は加えまい。

私の事は気にせず、部屋にいたまえ」

「で、ですが、旦那様は……？」

「私の事は気にするなと言つたのだ。

行きたまえ」

「は、はいッ」

その侍女が他の侍女を束ねて、部屋へと駆け込んでいく。  
これで良い。主人は誰もいなくなつた廊下で呟いた。

廊下を早足で歩き、階段を下りた。

玄関。だが扉は開け放たれ、西と東に延びる廊下には執事と手伝い  
とが立つていた。

扉の前には、黒衣の男。

「君達は部屋に隠れていたまえ。

それで良いな、イヴァン」

侍女達と同じ事を告げ、主人は黒衣の男の名を呼んだ。

「良いでしょう」

イヴァン、という黒衣の男が頷く。

それを見て、手伝いが下がつた。

だが執事は逆に、主人の前へと進み出でくる。

「我が主人を殺すのであれば、私を先に殺しなさい

「下がつていなさい、バトラー」

「イヴァン殿。

貴方にどんな大義があるのかは知りません。

ですが私には大義があります、他の何物とも代えられぬ大義。主人の命を守るという大義です」

「余りにも小さな大義、そうは思わないのですか、バトラー。私は国民の為に、その方を殺さなければならないのです。

最早この国に、皇帝とそれに従う人間は、必要無いのですから」

「民主主義ですか。なんとも盲目的な。

大衆を迎合すれば、より多くの幸せの代わりにより多くの犠牲を払わなければならない。

それがわからぬお方ではありますまい。近衛隊隊長、イヴァン・ムーン殿」

「より多くの犠牲を払つてでも、1歩の大きさを望む。

そんな時代を歩むべきなのです、人間は。

今いままでは犠牲の無い時代は到底迎えられません」

長々とイヴァンは語る。

極力、関係の無い人間は斬りたくないと思っている様だ。あの男達を冷徹に斬り捨てた割りには、情け深い。

やはり、この男は殺すまい。

思い、主人はバトラーを蹴り飛ばした。回し蹴り。バトラーの側頭部をえぐつた。

主人からの思わぬ攻撃に、バトラーは為す術も無く壁に打ち付けられ、意識を無くす。

「手荒な真似を」

「いうせねば、犠牲は止められないのだ。

イヴァン、もう一度考え直せ。

私はこの国の宰相として、やるべき事をやつていただけなのだ。  
それを君の仲間にも諭してやつてはくれないか

「できません、宰相閣下。

そうやって貴方は国を売つてきた。奴隸といつ形で、貴方は国民  
を他国に売つた

「仕方が無かつたのだ。わかるだろ、イヴァン」

「見下げ果てたお方です」

イヴァンが肩に片刃刀を乗せた。

そこから一気に振り上げ、袈裟に斬りかかる。主人はそれを、刀の  
腹で受けた。

ギチギチ、と刀同士が威嚇の声を上げる。

ギィンッ！

僅かな手際で、主人は片刃刀をさばいた。

そこから手首の動きだけで、刀を構え直す。斬りかかる。脇を締め  
る事でどうにか切れ味を發揮させた。

剣閃はイヴァンの胸を僅かに払つただけ。血も出ない、体にすら到  
達しなかつた。

イヴァンは後ろに跳び、距離を空ける。

「「オオオオオウ……」

呼吸法で息を整えるイヴァン。

それを見て、主人は肩を震わせた。

だが時既に遅し。次の瞬間にはイヴァンが地を蹴り、向かって来ていた。

両手で、片刃刀の柄を握つて。

ギッ

振り抜かれた片刃刀、受け止める刀。

それは重なり合い、弾かれるかと思われた。

しかし、片刃刀の刃が、刀に食い込んでいく。

最初はゆっくりとしたモノの様に見えた。それは時を経るに従い、加速し、気が付いた時には刀は斬られ、主人の喉も切られていた。

その傷は僅か。致命傷ではなく、声が出なくなる程でもない。だが激痛に堪えかね、主人は床に倒れ込んだ。

「斬鉄ッ……。抜かっていた、君の奥義だつた筈なのに」

「国の為、死んで下さい、閣下」

「ま、待つてくれ」

斬られた刀を放り出し、主人は手でイヴァンを制した。

イヴァンは止まらない。片刃刀を振り上げ、主人に狙いを定める。であるから、主人は急いで用事を告げるしかなかつた。

「約束してくれ。

家の者には手を出さない、と。

また君は絶対に自らと他人の手で死なない、と」

「　良いでしょう」

イヴァンは一言、静かに答える。

それで、主人としては言い残す事は無かつた。

やり残した事は山ほどあつたが、それは今日中にできなかつた残業の様なモノ。諦めるしか無かつた。

目を伏せ、主人は降りかかつてくる刃を受け入れた。

(後書き)

こちらもストーリーはありません。

敢えて蛇足するなら、絶対君主制の国で革命が起き、クーデターが発生する直前辺り、でしょうか。

これが革命の引き金なのか、クーデターの一環なのか。  
そこまではわかりませんが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3870f/>

---

民の剣と国の楯

2010年10月15日23時29分発行